

パシフィック・ルーツ

Good Music from the Pacific

初めまして。太平洋と日本を音楽・アート・飲食をはじめとした文化で繋ぐ《Pacific Roots Project (パシフィック・ルーツ・プロジェクト)》を主宰している佐藤航&野崎伸治と申します。今号から本誌で太平洋のミュージックシーンやアーティストを紹介させていただくことになりました。太平洋の音楽はまだ日本では馴染みが薄く、情報が限られています。この連載を通じて太平洋に散らばる良質な音楽について皆様に紹介できればと思っています。また、皆様オススメのアーティストがいたら、是非教えていただき、皆で情報交換できればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

《Pacific Roots Project》とは

さて、第一回は自己紹介を兼ねて私たちが行っている《Pacific Roots Project》のご紹介と、私たちと縁が深いアーティストのひとり、フィジーのミュージシャン DAKEI (ダケイ) へのインタビュー記事をお届けします。

《Pacific Roots Project》は、太平洋のグッドミュージックを日本に紹介したいという思いから2011年に、太平洋出身アーティストの楽曲を集めたCDを制作したところからスタートしました。「南の島の風が吹く極上の音楽体験」をキャッチフレーズに、太平洋で活躍する様々なミュージシャンの音楽を集めて一枚のアルバムを制作、「Pacific Roots vol.1」と銘打ってMedia Factorから発売したのは、2011年7月のことでした。苦労も多かった初めてのアルバム作成でしたが、幸いなことにiTunes レゲエチャートで1位を獲得するなど各方面から高い評価をいただき、以後CD制作はシリーズ化していきました。



「Pacific Roots vol.1」ジャケット装丁

現在までのところCD「Pacific Roots」シリーズは、vol.5までリリースを重ね、おかげさまですべてのアルバムが、iTunes レゲエチャートの1位を獲得しています。本シリーズに参加したアーティストの一部をご紹介します。

- DAKEI (ダケイ) -Fiji- [vol.2 収録]
南国フィジーにおいて唯一無二のブルースにも精通するハスキーヴォイスでリスナーを惹きつけているシンガーソングライターです
- Alexia (アレクシア) -Fiji- [vol.2 収録]
暖かみのあるアコースティックな楽曲に定評があり、フィジーで現在最も期待されている女性シンガーソングライターのひとりです
- Common Kings (コモン キングス) -Hawaii- [vol.3 収録]
メンバーの大半が南太平洋出身者で、ロック、レゲエ、



横浜で開催された「Pacific Roots FEST 2016」の様子

そしてアイランドミュージックの影響を受け、ワールドワイドなヒットを生み出しています。最近では2018年グラミー賞のレゲエアルバム部門に作品がノミネートされました

- NRG Rising (エヌアールジーライジング) -NewZealand- [vol.3, vol.4 収録] マオリ文化の継承をテーマに、マオリ族の伝統を音楽で表現している母と娘のユニットバンドです
- Gurrumul Yunupingu (グルムルユヌピング) -Australia- [vol.5 収録]
盲目のシンガーソングライターで、エリザベス女王やオバマ大統領に生演奏を披露した経歴もあるオーストラリアを代表するミュージシャンのひとりです

ご興味のある方は、「Pacific Roots」で検索していただければCDの入手は可能ですので、ぜひアクセスしてみてください。

また、これら全作品のジャケットアートワークを担当したのは、日本人のDragon76(ドラゴンセブンティックス)。彼はニューヨークを拠点に、MLB、NBAや、サッカーのリヴァプール、アーセナル等にイラストを提供している気鋭のアーティストです。彼もまた、Pacific Rootsのコンセプトに共鳴し、作品提供を快諾してくれた仲間のひとりで、私たちはこうしたアーティスト同士の交流の輪を広げていきたいと思っています。

ます。

CD制作と平行して、ライブ企画についても2012年にフィジー政府観光局との提携でフィジーからDAKEIを招聘、「Fiji Night / Pacific Roots Night」として、六本木、横浜、葉山の3カ所でライブを行いました。そして各方面からご注目いただく中で、2014年には夏の音楽フェスとして、太平洋の文化交流促進を目的としたイベント「Pacific Roots FEST」を横浜港大さん橋で開催し、1万人の観客を集めることに成功しました。横浜でのFESTは、ミクロネシア連邦大使館、サモア大使館、太平洋諸島センターなどのバックアップもいただき、その後3年連続で開催しています。これまでのFESTには、AWA (ニュージーランド)、SONS OF ZION (オーストラリア)、SEKENAN (ミクロネシア連邦)、Cheap Fakes (オーストラリア) など、太平洋各地からミュージシャンが参加しており、日本と太平洋のミュージシャンの貴重な交流の場として高い評価をいただくとともに、太平洋を肌で感じる野外フェスとして多くの方々に楽しんでいただくことができました。またこうした中、2015年には太平洋諸島センターが主催した島サミット併催事業「パシフィック・フェスタ」でも、アーティストブックイング協力を行っています。

私たちは、太平洋に共に暮らす仲間たちの音楽やアートを通じた交流のプラットフォームとして、今後も様々な企画・イベントの提供をしていきたいと考えています。

フィジーの音楽シーン

～ DAKEI 氏インタビュー～

さて、連載第一回の後半は、フィジーのミュージシャン DAKEI 氏へのインタビューをお届けします。先ほどご紹介したとおり、彼は 2012 年に日本でライブツアーを行いました。その際に宿泊した渋谷の街にインスパイアを受けて「Down Shibuya」という楽曲を制作しております。



Q、2012 年の日本でのライブは素晴らしいものでした。まずは最近の活動状況について教えてください。

A、現在は、フィジーの仲間 4 人で結成したグループ「MAKARE (マカレ)」の一員として活動しています。2012 年に日本に行った当時はソロ活動がメインで、日本でのライブもソロで行ったのですが、残念ながらソロで発表した楽曲はフィジーの音楽マーケットでは人気を得ることができず、今はソロ活動は休止状態です。

MAKARE では、フィジーの伝統的な楽曲の素晴らしさに立ち返り、これに現代的解釈でアレンジを行って発表しています。そしてそれによってフィジーの素晴らしい音楽を若い世代に紹介し継承していくことをメンバー全員で目指しています。

Q、マカレはアイランドスタイルの融合をテーマに、太平洋諸島をはじめ世界各地のアイランダーに大きな影響を与え人気を得ていると聞いています。ところでダケイさんはそもそも何故ミュージシャンを目指したのでしょうか？

A、祖父の影響です。私の祖父はソロモン諸島のコロバンガラ島出身で、1960 年代に「Solomon Dakei and His Islanders」というバンドのリーダーとして音楽活動をしており、フィジーとソロモン諸島で人気のミュージシャンでした。スチールギター片手に多くの曲を作る祖父の影響で、私も幼い頃から音楽に触れて育ち、10 歳からは教会合唱団にも所属していました。

Q、おじいさん以外に影響を受けたミュージシャンにはどのようなアーティストがいますか？

A、ボブ・マーリーですね。そしてジョン・メイヤーも忘れられません。彼のシンプルなギターラインは、

私の曲作りと演奏スタイルに大きな影響を与えました。プライベートではフィジーのミュージシャンもよく聞いています。Daniel Rae Costello や Fiji Veikoso、それから幼い頃にはフィジーの音楽シーンの草分けともいえる Sakiusa Bulicokocoko や Tui Ravia など繰り返し聞いていました。

Q、みなフィジーの有名どころですね。では今ダケイさんが注目しているアーティストを教えてください。

A、太平洋には素晴らしいミュージシャンが次々と登場しており、フィジーだけでも名前を挙げたらきりがなくなりそうです。恐らくパシフィックミュージックが新しい音楽ジャンルとして世界に認識される日も遠くないでしょう。

そんな中で敢えてひとりあげるとすると、私がいま注目しているのは KNOX (ノックス) です。ユニークなギタースタイルを持っていて、民族の違いを超えた太平洋の異なる国々においても共感を得られる楽曲がたくさんあります。ぜひいちど聞いてみてください。

Q、太平洋島嶼国にはフィジーと音楽的に近い国もあるのですか？

A、実は、私は今ソロモン諸島で暮らしていますが、ここに住んでみて、太平洋の島々は、国は違っても似たような音楽への感性をもち、音楽的な繋がりや協力には常に関心があることを改めて感じています。音楽のテイストは島によって多少異なりますが、ベースにあるものは同じです。

Q、太平洋の島々が同じアイデンティティを持つ仲間だと、音楽を通じて感じられているわけですね。ではそういう状況を支えるフィジーの音楽シーンの現状について教えてください。

A、世界は常に変化と進化を続けており、そんな中で私たちがより良い音楽を提供するための課題は少なくありません。サウンドやパフォーマンスを支える機材のアップデートや、ミュージシャンが生活を維持するためのメカニズムづくりは常に意識しなければならないところです。フィジーでは、音楽はラジオを通じて接する機会が多いのですが、CD のマーケットは限られており、音楽レーベルもみな小さな規模のもので、音楽を産業として支えるマーケットはフィジーのような地域では比較的大きな国でも、国内だけでは難しい状況でした。

そうした中でインターネット環境の飛躍的向上は、既存の音楽産業にとっては大きな課題と同時に、大きな可能性も秘めていると思います。インターネットを通じて世界に繋がるオンラインマーケティングは、太平洋の島々の音楽を広く世界に発信する大きなチャンスであり、ミュージシャンが音楽で生活できる環境を整える可能性を秘めています。

Q、新しい時代を迎えて、ダケイさんご自身が目指している方向性もそこにあるというわけですね。

A、そのとおりです。私自身の夢は、世界レベルのレコーディングスタジオをフィジーに創り、地元のアーティストが質の高い音楽を制作できる環境を作ることです。たとえばそのスタジオを拠点に、インターネットを通じて日本のミュージシャンと一緒に音楽を作ることも可能になるのではないのでしょうか。私はフィジーに居ながらにして日本のミュージシャンと一緒に音楽制作をする、そんな日が、近い将来かならず来るのではないかと期待しています。

Q、ぜひそこに私たちも参加したいところです。では最後に、ダケイさんにとっての日本のイメージを教えてください。

A、日本に滞在したのは短い時間でしたが、率直に言って日本は太平洋の様々な才能を紹介するのに最適な場所となる可能性がとても大きいと感じました。それは資金力や最先端のテクノロジーを持っているということもそうですが、何より日本人は多種多様な価値観と感性を持っており、新しい音楽的なアイデアにはとてもオープンな印象を強く受けたためです。その意味でも Pacific Roots の活動とは今後とも連携を取っていただけることを願っています。

(取材 / 構成 / 文 佐藤航 & 野崎伸治)



「Pacific Roots vol.2～5」ジャケット装丁